

早春の日向路へ (二)

ふるさとと結ばれた歴史を尋ねて

佐伯史談会会員
畑野浦史談会会長 富澤 恭

○日向路の歴史

青島の朝日、遠い潮騒の音で明けてくる。洩ったAホテルは、経営者が蒲江町出身だけに、家族的な、心あたたまる接待に、前日の車の疲れをすっかり忘れさせてくれた。

午前八時半宿舎を後に、日南海岸へのロードパークは目的がちがうので、宮崎神宮を目ざして、昨日来た道を引きかえす。今回の一つの目的地、宮崎県総合博物館はその神苑の中にあるからである。

日向路の歴史は、天孫降臨の神話にほじまる。日向は神話の国であり、さらに五世紀頃からの多数の古墳の国である。そしてわが豊後に隣接し、古代から深い関係の国である。

ここで日向の国の大体の沿革を考えてみよう。まず国の南部は島津の荘園で、中央部は八条院領、北部は宇佐神領が代表的であった関係で、豊後との深いかかわりあいが生じた。

くだって十四世紀の初め、伊東祐持が今の西都市、都於郡に城を築くに及び、宇佐神領の土持氏、南部の島津氏との間に抗争が起り、天正五年(一五七七年)伊東氏は島津氏に敗れ、大友宗麟を頼って逃れた。

翌六年大友氏は土持氏を滅ぼし、さらに南下して高城付近に島津氏と対戦し、大敗を喫した。その結果、島津氏は南九州を支配する大勢力となったが、その後豊臣秀吉の九州統一、関ヶ原合戦後の徳川氏の割拠によって封建体制が確立され、それが明治維新まで続いた。

延岡地方は、高橋氏・有馬氏等を経て内藤氏に、高鍋の秋月氏、佐土原の島津氏、豊肥に伊東氏が家名を再興し、南西部が島津領に分割された。

「緑と太陽」と「神話」の日向は、それら観光の点を線で結ぶ「ロードパーク」は、早く昭和の初期に発想されたものであるという。

旅行く人々は、日のぼりとした素朴な自然に、人工を避けこまいた手法は、卓絶した観光行政の集積ではなからうか。

神武天皇東征の宮居の跡、土地っ子の愛称「神武さん」の杜に、玉砂利を踏んですすみ、鈴を鳴らして拝殿にゆかづく。私たちはただ無心に祈るだけで、そこにはただ太古の神々の姿すら感じられる。

宮崎の古き歴史はわが郷土の産土神とおなじくになり (松木宮司)

○宮崎県総合博物館

博物館は宮崎神宮の神苑の一角にあった。羽柴先生との先約で、同館学芸課長沢先生と、同課主事で民俗調査を担当の泉房子先生が、快く迎えて下さった。そして早速館内を案内して下さり、数々の歴史や地誌などの展示品と、今回特別に陳列の「日向の古地図と古書」を、懇切に説明下さった。全く有難い機会をいただき、良い勉強が出来た。

この博物館は、きわめて洗練された現代建築の偉容を

示して、その竣工は昭和四十六年であるという。しかし、既に昭和二十六年県立博物館として発足し、土地柄歴史と特に考古学を主として来たが、昭和四十二年に明治百年の記念事業として企画され、総合博物館として昭和四十六年完成したものである。

外部の偉観と共に、内部の展示は二十年間にわたって蒐集されただけに、全県の考古資料・民俗資料をはじめ美術・自然・動物・植物などに亘り、豊富に資料を陳列してあるので、一巡しただけで日向の全貌が了解される大展示場である。

沢先生の適切なご説明で、とくに考古学に未知の私たちがとっては、得る処多大であった。しかし紙数の都合でおき、今回の旅の目的である「ふるさとと結ばれた歴史を訪ねて」にそって、二、三点だけ抜き出して紹介して見よう。

① ビロウの自然林

私たちの町にも、大分県指定の天然記念物ビロウの自生地、黒島がある。したがってこれまで、ビロウの自生について疑問をもっていた。このビロウ自生の問題を、この博物館で大きく取扱っている。島崎藤村の「椰子の実」の詩を連想しがちになるのは、私だけであるうか。宮崎の自然の中でも、ビロウの自生林青島は有名で、大きなパネルでこれを解明しようとしている。

「ビロウは南国から流れついたものであるうか。青島のビロウは、海辺にすぐ自生して、全島鬱蒼と繁っているが、多くの自生林は、海岸線からはなれた高い所や山頂にある。」

そのビロウが、太平洋の黒潮に乗って漂着したものであら、砂浜もなくしかも標高の高い処にあるのは、一体ど

うしたわけであるうか。黒島の場合は一二〇呎の山頂から、中腹の断崖にかけて自生している。

「ビロウの種子の構造からしても、漂着にたえる質のものであるうか。——南の国から流れついたものではないらしい。むしろ大昔からあったものが、気温等の関係で、たんだん少なくなつたものではないか。」

と、博物館のパネルは解明している。

ビロウ對の成因は、漂着植物説と、太古より日本に生育していたものの遺存説の二説があり、日本の植物学者の見解は分れている、——と青島神社の案内板は誌しているが、果してどちらが正しいのであるうか。

② 刀工堀川国広と大友氏

美術展示品の中に、日向が生んだ刀工堀川国広の一刀があった。国広は後に山城(京都)の堀川に住んだので、堀川国広と呼ばれ、新刀期(慶長年間以降)の初期、つまり江戸時代初期、江戸の長曾祿虎徹と共に、この時代の双壁であり、巨星であった。

この国広は、島津氏に滅ぼされた伊東家の家臣で、伊東氏が太友宗麟に助けを求めて豊後に亡命した際、伊東氏一族の少年伊東満千代に仕えて、その分護の役にあたり行を共にしている。

天正五年、満千代八歳の時である。太友宗麟はそれが姪が伊東氏と縁を結んでいる関係上、その乞いを入れて兵を日向に進めた。

天正六年、四方の大軍を擁して島津討伐に当たったが大敗、吾々の先祖佐伯宗天(十二代惟教)父子と、郷土の軍勢(前号)も耳川の合戦に、壮烈な戦死を上げたのであった。

当時宗麟は、すでに府内城(大分市)を出て、臼杵の

丹生島に城を構えていたが、伊東満千代ともいふ國広は臼杵に滞留したものであるが、あるいは府内であつたか。

天正十年、九州のキリシタン大名、大友・大村・有馬の三大名は、ローマ法王廳に四名の少年使節を派遣した。これは歴史上有名な話であるが、この満千代が即ち伊東満所で、十三歳から正使であつた。

この使節團は欧州にあること八年、欧州各地を廻り日本に帰つたが、既にこの時は秀吉の禁教時代にはいつていた。しかし、欧州の文明を日本にもたらした、文化使節的意義は深い。

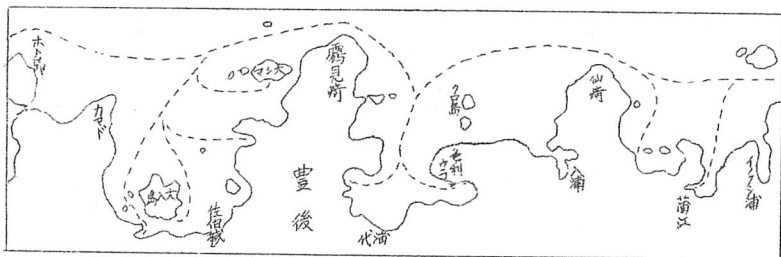
國広は、満千代君の渡欧により分護の任を終え、郷里日向の郷に帰り、法華教に入つて山伏となり、一翫刀工として再出奔を志した。乃ち名家の再興と、刀工鍛錬の途を求めて諸国流転の人生は、遠く関東の足利学校まで足を伸ばし、最後に京都で埋忠明壽に教えさうけて此の地に定住、作刀技術のみならず多くの門下生を養ひ、日本刀工史上特筆すべき大刀匠に成長したのである。

國広が豊後滞在五年の行動については、私には資料がない。當時すでに鶴崎の在高田地区には、高田刀工が台頭して、これらとの技術交流の有無など、興味のもたれる点である。

伊東氏は秀吉の島津征伐に従ひ、その功により家名を再興し、乃ち徳川氏に服し、飯肥五万石は幕末まで続いたのである。

① 古地図の中の海路図

「日向の古地図と古書」の中の古地図は、日向を中心九州あるいは日本全国図など、八十二点出品されてきた。印刷術の発達してない時代のものが多いだけに、毛



筆書きのものが多かつたが、時代が上る程現代の完成された地図と比較すると、その差異に興味深いものがある。江戸時代の初期幕府の命により、各藩の図絵図が提出されてくるが、正保年間(一六四〇)がはじめて元禄時代(一六八八)にも行なわれ、それらを集めて日本総圖と作製した人、建部賢弘(一六四一—一七三九)がある。近代的地図は伊能忠政に負う延があるが、佐伯地方も文化七年(一八一〇)忠政によつて、海岸測量が行なわれている。

この展示の古地図の中、高鍋町立図書館所蔵の「美々津より大坂は船路」、遊湖は百八十里余、時代は記載されてなく作製年代は判明し難いが、海岸線の出入りと浦々の地形からみて、元禄時代以前にさかのぼるものではないかと推測して見た。(上四)

この地図は、高鍋藩の参勤交代に使用したものが、あるいは単に海上物資の輸送のみに使用したものが、当地(高鍋)と日向は直接海を接しているだけに、まことに興味ふかい地図である。江戸時代の上方向の海上交通の貴重な資料なので、後日高鍋町立図書館について調査したいと考へて見ると、

美々津(三重)細島(三重)赤水(三重)
 (重)鳥の浦(重)猪早(重)鶴崎
 (五重)入浦(重)色利浦(重)
 入浦とあるは入津である。(以下略)

地図は入念に写真に収めたが、陳列ケースのガラス越しで成功しなかつたが、その一部を模写したのが前掲の図である。

当時の船の構造、航海術未熟のため、風待ちや潮待ち、時には台風の避難などから、港と港の間を克明に記入されている。

図中にある猪串浦は、往時日向の通い船の寄泊で、浦は随分と賑あつたという話が残っているが、奥深い港の中にある弁天島の陰に守られた天然の良港は今も変わらないが、夜毎に三味線の音色にぎやかには、定めし陸の弁天様の余徳もあつたことであらう。

○西都原古墳公園

神宮さんの森を後に、国道十号線を途中左に、国道二一ノ号線は一ツ瀬川流域の佐土原を経て西都市である。さらには梶原西米良を過ぎれば、道は熊本県湯の前から入吉の町へ通ずる。

しかし、目指すは西都原である。ここは曾遊の地として、前田・山下両君が八咫の鳥役の道案内で、時々道に迷いながら西都原の古墳公園に達し、「御陵の茶屋」の前に車を停めた。ここです、空いた腹を満たせば、もう二時に近い。

まずこの西都原古墳を、資料によつてその概要をしばらく見てみよう。

西都原古墳群は、九州でも最大の数が一区域内に点在しているのが特徴である。東西二、六畑、南北四、二畑にわたり、標高六〇mの洪積台地に、総数三二九基の古墳が散在している。大小さまざまで、繁つた森の中に、耕された茶畑や麦畑の中に、また野原の草焼く煙の中に、もり上つた姿を見せている。

この大古墳群は、特別史跡公園として原形を損せず、森は守られ道路が整備され、街路樹が植えられている。三千本という桜は大きく枝を張って蕾をたくさん着けていて、資料館をとりまく広い芝生と樹陰の造園は、都市の喧騒を全く忘れさせる別天地である。

鬼の墓古墳

西都市観光協会が立てた標示板があつて、次のような言葉が書かれてある。

「古代日本が、いまなお息づいている

神話と伝説の西都

このキャッチフレーズをすなおに肯定し、子を待つ親なれば、一度は是非ここに子供たちを遊ばせたいと思うであらう。

私たちが、まず古墳群の中心といえる男狭穂塚、女狭穂塚に詣でる。

この古墳は、天孫瓊々杵尊と、木花開耶姫の御陵と伝えられ、御陵墓参考地として指定され、宮内庁の所管になつている。男塚は高さ一八m長さ二一九m、女塚は高さ一五m長さ一七四m、面積一〇八ヘクタール余、九州では最大の古墳である。しかし御陵全面は樹木が生いしげり、古墳というよりは森として、何か神祕を感じさせるものがある。

歌人木俣俊が、その姉北原白秋と共にここに遊び、次の歌をのこしている。

女男の神よりそふごとく鎮もらす筈狭穂の
二つのみささぎ



春早又 塚に太古き思うかな (五 唄)
きさらぎ也 古墳にやがて草萌えん

○ 西都原の資料館で

この資料館は、宮崎の総合博物館の分館に成っている由で、沢先生からのご連絡もいただいていて、係りの方から懇切なお話しを伺いながら一巡する。もっぱらこのあたりから出土の古墳時代の遺物が主で、西都原古墳の考古学的な説明をきいた。

お話しによると、この台地の古墳を中心に、周辺の地域だけでも古墳の数は八〇〇基、近隣町村を合せると一〇〇〇基を越し、宮崎県内の過半近くがこの周辺にあるという。まさに西都原古代文化園と呼ぶ考古学の先生もあるというが、古代日向の政治・文化の中心を打った地帯であったことは確かであろう。

古墳の種類は、前方後円墳・方形墳・円形墳、さらにこの地独得の地下式墳もあるという。前に挙げた男狭穂塚・女狭穂塚に次いで有名な「鬼の窟古墳」は円形墳である。

これら古墳築造の年代は、五世紀に入って早々の中期古墳から、六世紀代後期古墳がほとんどを占めている。日本各地の古墳地帯で、この古墳ほど盗掘されてない地はないというが、その理由が次のようにいわれている。

④ 五〇〇年以前から地居住民たちによって、古墳祭祀が行なわれて大事にされてきている。

⑤ 台地一帯が共有地であるので、個人的な処分が出来なかつた。

西都原の古墳群は、今から六十年以上前の大正元年から六年まで、大規模な学術調査が行なわれ、その周辺の自然が保たれ、近代的な俗化がなされてない点は、特徴

であり、誇りでもせる。

奈良朝期の屯倉があったという三宅の地、また国分寺跡、中世九州でも屈指といわれた「都於郡城址」など、日向の古代文化への郷愁深いものがあるが、今日はそれらと訪ねる余裕はない。

車窓から北に展覧の山並みさながらめながら、西都原を後に町に下った。

西都原遠き祖先のさとすがたしのびて知るや
古きなりはひ へ松水宮司

○ 高鍋は城下町

西都市から高鍋の町に入るのは、国道二一九号線から一〇号線を横に結べば簡便の筈であるが、二人の八咫鳥役はどうしたことが、車は一度、二度と迷路に入り、ようやく高鍋の町に着いたのは五時過ぎであった。

この町で、公民館活動について研修をする予定で、朝青島のホテルからこの郷土出身の川家に頼んでいたが、その時間はいよいよ過ぎていた。それは断念して同家で茶菓を手作りのお寿司のもてなしに、一同遠慮なくご厚情に甘えた。

高鍋は秋月氏の城下町、今日宮崎総合博物館で閲覧した「美々津より大坂への船路」の地図は、当所から出品のものである。

私はこの町について、二人の人物に関心を持っている。一人は高鍋藩最後の城主秋月種樹公、一人は佐伯藩に仕えて藩学四教堂の名儒官だった秋月橋門で、お二人共当秋月氏の出である。

種樹公は碩学の名君で、維新後明治天皇の学問の師となった人である。江戸上洛のみぎり海路であったので、航行の都合から藩江に寄港、蒲江の東光寺に宿泊なさ

たことがあるようである。私は青年の頃「医王山東光寺席上画」と題した、新崖に蘭を描いた軸を見た記憶があるが、程樹公の書画は佐伯地方には受蔵家が多い。なお奥州米沢藩主上杉澄庵（鷹山）公は、当秋月氏の出で上杉氏に養子となつた人で、寛政の頃奥州白河藩主松平定信（楽翁）と並び称され、名譽の誉れ高い人である。

秋月橋門については「佐伯市史」に詳細伝えられているが要約しよう。

橋門は、日田の広瀬淡窓の門に学び、その学問は傑出。佐伯に來て高妻芳洲の許に身を寄せ、その推せんにより佐伯藩の儒官となつた。そして十一代高恭公、十二代高謙公二代にわたり、藩学四教堂の教授となつて、藩士の子弟の教育に成果をおげた。

維新後明治政府に召し出され、三河県（静岡）知事、葛飾県（千葉）知事として治績を挙げた。長男新太郎は佐伯招魂所の「敵愾之碑」を書いた人で、彼も明治政府の高級官吏であり、父子共に能筆のほまれが高い。

橋門は詩文にすぐれていたが、夷峯の詩が有名である。

夷嶺暮蒼苔（おんざん）と東雲深く
 踏澹凍雲深
 寒鴉欲結舌
 天晴不見山
 唯見千尋雪

寒鴉（かんあ）舌（し）を結ばんと欲す
 天晴るれども山見えず
 ただ見る千尋（せんじん）の雪

○終りに

早春の日の暮れは早い。延岡を過ぐる頃は、すでに夕や及びせまっていた。所外れの田園の家々から、灯の光りがあちこちに見られる。

どのお祭りか「無産」であらうか。北川沿いの部落だとはいうが、「むしか」とはラテン語で「音楽」という意

味だそうなの。
 大友宗麟が日向出兵のかくれた一つの理由に、仏教徒の一人も居ないギリシタンだけの自由な国を、日向に夢見ていたということ、中村真一郎氏の「古寺祭櫓」で読んだことがある。

戦国時代の武將としては、必ずしもすぐれた名將ではなく、さらに豊後國東地方その他あちこちで、仏教文化に対する破壊など罪状の数々があげられている。しかしヨーロッパの文化や宗教を学び、新しい時代を創造しようとした業績は、永久に忘れられない時代の英雄であるので、とくに郷土人として研究すべき人物である。

「むしか」の里は、白日の下に、現代の目でみるのでなく、四〇〇年の遠い時代のかたわに、幻想のようには「音楽の町」を心に描きながら、暗れ果てた帰りの道と車にゆられていた。

車は国道十号線を、葛葉から分れて右に入り、蒲江への道、三川内の谷に沿って走っていた。
 （おわり）

紹介

六、分合同新聞の紙面

（羽柴）

去る五月十一日（日曜）カラーの紙面に、大きく「往時そのまにーやがら門修築工事が完成」と、カラー写真で新装成った橋門の紹介があった。

その翌日、月曜日の夕刊に「小藩物語」一佐伯藩の第一回が掲載された。佐伯藩史を正確に把握するためには、この上もない好読物。ちようど幸い新聞社からそのPR版が届いたので、この百号の付録のような形で、全会員にお届けする。

この機と失わず、資料確保を希望する次第である。